

共同研究プロジェクト

「傍系ナショナルアイデンティティの

国際比較研究」

〈中間報告〉

プロジェクト代表 児島 峰

本プロジェクトは、国民国家の主流派がつくるナショナリズム、また、それに抗うマイノリティのナショナリズムについては膨大な研究が蓄積されてきた一方で、既存の国家概念とは異なる集団におけるアイデンティティに関する地域横断型の研究がなされていないのではないか、という疑問から始まった、萌芽的研究ということができる。

本共同研究プロジェクトは、2018年度から3年間を予定しており、これまで、異なる地域を専門にしている各自が、調査方法などを共有しながら、それぞれの専門地域においてフィールド・ワークおよび研究を進めてきている。

2018年度は、3名のうち児島が、フィールド・ワークを中心とした研究を進めてきた。以下に、その概要を記述する。

児島は、2018年度にオランダ王国自治国キュラソー島にてフィールド・ワークを実施した。そこでは、カトリックの祝祭としてのカーニバルの人気の高いことが分かった。オランダはもともとカトリックであるスペインを嫌って独立した歴史があることから、このような逆転は興味深い現象である。

実際、キュラソーではカトリック人口の比率が高い。これには、周囲をカトリック教徒が多い島に囲まれているという地理的要因が大きいと思われる。毎週日曜日の教会でのミサが、人脈形成に大きな役割を担っているよ

うであった。

1960年代に始まった、カーニバルの祝祭を定着させようという試みは、プロテスタント教徒による反対によって困難を極め、ようやく、1971年に行政とも合意に至り、現在に至っている。これらのことは、現地でしか入手できない新聞や文献などから明らかになった。

しかし、さらに興味深いことに、近隣のスペイン語圏から来たカトリック教徒には、このキュラソーのカーニバルが不評なのである。

これまで、カリブ海では、独立国家であるキューバとドミニカ共和国、アメリカ合衆国自治領であるプエルト・リコ、フランス海外県マルティニークとグアドループでのフィールド・ワークを実施してきたが、キュラソーの調査で明らかになったのは、政治的にも文化的にも、自治独立性が非常に高いということである。その理由として、オランダ本国が植民地としていたキュラソーにオランダ語を浸透させることができなかったということが挙げられるであろう。オランダ語は教育によって義務化されているが、キュラソーの私的空間においてオランダ語が話されることはない。地上波で放送されるテレビ局に、オランダ語放送がまったくないのである。人々が観ているのは、ベネズエラのテレビ局の放送であり、また、地元の人々が話すパピアメント語はスペイン語に非常に近いため、スペイン語圏に対して、人々は寛容である。オランダ語と英語の位置づけがほぼ同じで、パピアメント語、もしくはスペイン語を話せない限り、キュラソー人とはみられない。キュラソーにはオランダからの移住者もいるが、彼らはオランダ語しか話せないため、日常生活では苦労している。

フランス海外県であるマルティニークとグアドループは、食料を含めて物資すべてをフランス本国からの輸送に頼っているが、キュラソーは経済的な自立も果たしており、地理的に近いベネズエラから果物などを輸入している。また、移民政策においても独立性を保っているため、コロンビア、ベネズエラ、ドミニカ共和国からの移住者が非常に多いのも特徴的であった。

今後は、立場の異なる複数のカリブ諸島における相違点を掘り下げ、カリビアン・アイデンティティなるものの可能性について検証する予定であ

る。

なお、カリブ諸島やブラジルなど、ラテンアメリカでは非主流派であるスペイン語以外の地域の研究者と学术交流を深め、言語と国家を超越した研究を深化させるため、2019年度より、京都外国語大学ラテンアメリカ研究所の「アフロ・ラテンアメリカ研究会」グループの一員となった。

2019年10月には兒島の中間報告会を開催し、泉水、八尾との有意義な討論の場となった。引き続き3名がそれぞれのフィールドで調査を進め、定期的に討論会を設けることで、今後の共同研究を深化させていく。